

## 信頼の回復のために業務を見直せ！

新幹線の安全神話はもろい物だ。昨年6月の225A事件から一年もたたない今月16日38Aで刃物を振り回す事件が発生した。今回は車掌が負傷するという辛い事件となったが旅客の負傷がなかったことは不幸中の幸いだった。

225A事件の際に会社は対策として、防犯カメラを設置することで「**見せる防犯**という観点から効果が期待できる」と記者会見したがその効果は現れなかった。それは誰もが危惧していたことだ。

225A事件のとき、分会はかべ新聞で「**お客様の安心感と防犯・セキュリティーの観点からも、一部改札の省略や簡素化などをして、巡回強化に軸点を置くべきだ**」と書いた。のど元過ぎれば熱さを忘れるといえるのか、3月のダイ改以降車内改札の一部省略を行なったが、資格確認や自由席の改札強化で逆に忙しさが増した列車も増えた。その後は**防犯対策よりも営業上の増益やサービスが優先され、巡回強化とは言葉の上でしか語られなかった**。

新幹線の手荷物確認は特性上困難だ。だが未然に防ぐことは出来なくても、事件に発展する恐れを感じ取ることができる場合もある。それを感じ取ることが出来るのは毎日乗務している車掌だ。業務＝実践で得た感覚と経験は机上で考えた対策を超えるものだ。**資格確認や自由席の改札をやめて巡回の強化にシフトを変えるべきではないのか**。たった一人の不法行為で安全も信頼も崩れる。「**また新幹線で事件かい・・・怖いよな**」と当たり前にも思われてはならない。会社は信頼回復をめざすためにやるべき事はあるはずだ。